

タチバナ遺跡 (鹿児島郡十島村中之島)

位置と環境

中之島は吐喝喇列島の中で最大の島で、中央北寄りに活動中の火山御岳がある。タチバナ遺跡は、中之島の東部、東海岸から約500mの位置にあり、標高165mの緩斜面に立地する。遺跡は南向きの緩やかな斜面に立地し、近くに湧水点があり、リュウキュウチクが繁茂していた。

調査の経緯

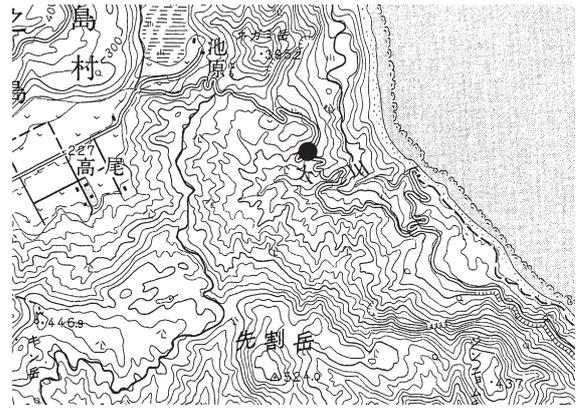
熊本大学法文学部考古学研究室の研究テーマの1つである「南西諸島における先史文化の研究」の一環として発掘調査が企画された。1973年に白木原和美教授が中之島在住の吉岡亀太の所蔵する遺物を実見し、タチバナ遺跡を確認した。この後に村道工事に伴って遺跡が一部破壊され、1974年に切り通しに遺構の断面が露出し、宇宿上層式と九州縄文時代晩期土器が混在していることが確認された。遺跡の実態解明のため熊本大学法文学部考古学研究室の実習調査として1977・78・79年の3年間発掘調査され、研究活動報告として2回にわたり報告された。

遺構と遺物

縄文時代晩期相当の竪穴住居跡群として、住居跡・炉跡がかなりの密度で分布し(第2図)、切り合っている状況がある。3次の調査で併せて、竪穴住居跡30軒、土壇14基、炉跡14基が検出された。円形住居跡は中央に大ピットを有する。大型ピットは、四隅に小形ピットをもち、各小ピットからは角礫が検出された。角礫だけでなく、石皿(L.S.11, 12)や磨石(L.S.13)も伴う。竪穴住居跡の覆土から、宇宿下層式土器、宇宿上層式土器(3・10)、一湊式土器(2・5・7)、喜念式土器(1)、黒川式土器(8・9)、入佐式土器(4)が出土し、それぞれ複数型式を伴って出土した。石器は磨製石斧(11~14)・磨石・敲石・凹石・石皿(15・16)などが出土している。石器は植物性食料の加工具が大勢をしめる。

特徴

竪穴住居跡群として、遺構の密度が高く、切り合



第1図 タチバナ遺跡の位置

っている状況がある。遺跡の立地環境が限定される島の特性と併せて、島に暮らす人々の集住化傾向などの選択性にも留意が必要であろう。

宇宿上層式土器の縄文時代晩期の可能性は指摘されていたが、タチバナ遺跡においてより明確に位置付けられた。また、一湊式土器が型式の崩れを見せながらこの時期まで存続することが示され、その後の一湊式土器の細分につながった。奄美系土器=壺、薩南系土器=甕、九州系土器=深・浅鉢という対応関係が見えるとする。石器は植物質加工具が大半を占める。住居跡の地域性としては九州島からの影響と考えられるが、中央の大型ピットなど特異である。

いずれにしても琉球と九州島や韓半島などの東シナ海沿岸地域の文化伝播や交流を考えるうえで重要な遺跡である。

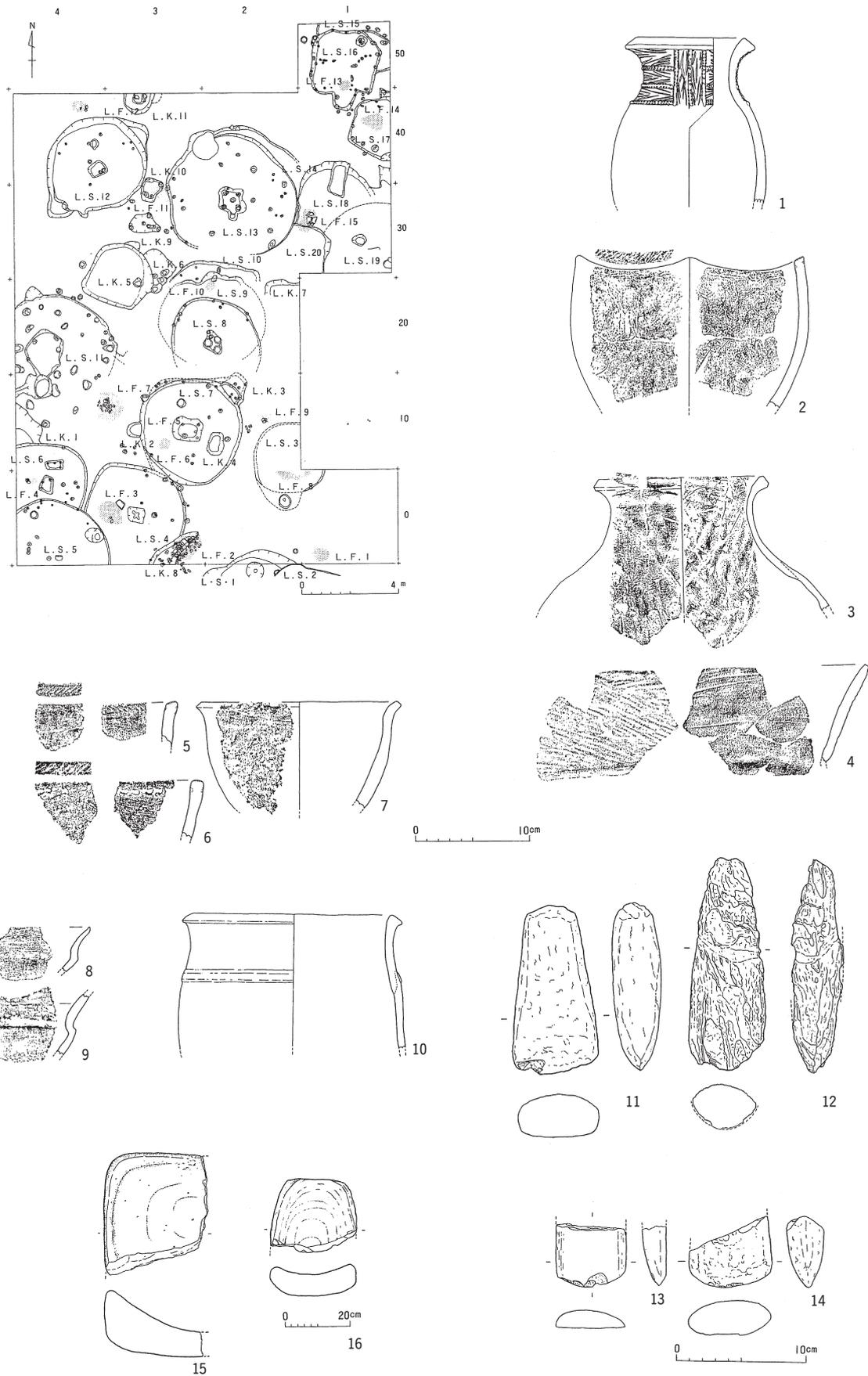
資料の所在

出土遺物は、熊本大学文学部考古学研究室に保管されている。

参考文献

- 熊本大学文学部考古学研究室1979「タチバナ遺跡」『熊本大学文学部考古学研究室研究活動報告』4
 熊本大学文学部考古学研究室1980「タチバナ遺跡(2)」『熊本大学文学部考古学研究室研究活動報告』7

(堂込秀人)



第2図 遺構配置図及び出土遺物